

一つの伝記論 (9)

安 達 肆 郎

目 次	
序	
一	
二	
三	利用された伝記
四	好事家的伝記
五	文学的伝記
六	歴史的伝記
七	
八	自己目的・自足的伝記 (1)
九	自己目的・自足的伝記 (2)
十	
十一	
十二	伝記は本来人間精神からいかにして生れたか (「本来の伝記」の成立)
十三	
十四	伝記は人間にとって本来いかなる意味をもつか——
十五	
十六	人間にとって「伝記」は本来何なのか——……………本号

7

われわれは、先に「文化としての伝記」の素性に関連して、a.「本来の伝記」の筆者のころと、「各種の伝記」の筆者のころとは、基本的には（立場においては）全く別ものであることを指摘したが、然し、b.両者は前述の様に、立場の相違にもかかわらず、肝心の諸点、即ち主人公に対する関心においても、読者に対する意義（「刺」をもつこと——後述——）においても類似している場合が多い。

してみると、「本来の伝記」を書く筆者のころと、「各種の伝記」を書く筆者のころとは、一応の立場においては別ものだが、実質的・内容的には互いに無縁ではなくて、根源的には深いつながりをもつのではないか、と思われ

る——。前述した「諸事実」が、そのことを示唆している。

「本来の伝記」の筆者のころと、「各種の伝記」の筆者のころとの関係に関する右の「示唆」は、「文化としての伝記」の先述の様に「くいちがい」を含んだ素性の真相に関しても重要な示唆である。

とまれ、右述した「示唆」を生かし、前述した「諸事実」を手掛りに、「文化としての伝記」の、「くいちがい」を含んだ「素性」の真相を見出し確認する手だてではないものだろうか——。

結論を先にいうと、「本来の伝記」の筆者のころの性質、「各種の伝記」の筆者の立場の性質についての、人々の従来の考え方をそのままにしておいて、「諸事実」をいかほど分析してみても、「示唆」された両者の関係の真相、やがて「素性」の真相を解明することはできない（後述参照）。

そこで、われわれに残された方途は、ただ、次の方途のみである。即ち、1. 「本来の伝記」の筆者のころの性質、「各種の伝記」の筆者の立場の性質に関する人々の従来の考え方を変革し、2. 「変革した思考法」に基づいて、「素性」の真相に関する仮説をつくり、それを、前述した「諸事実」に投入して、3. それによって「諸事実」が理解（説明）されうるか否か、ひいて、「諸事実」が示唆していた「本来の伝記」の筆者のころと、「各種の伝記」の筆者のころとの関係の真相が解明され、「文化としての伝記」全体の「素性」に関する先述したアポリアが解消されうるか否かを検証するという途のみである。

然し、われわれは何故、直接に「諸事実」を分析するだけでは「文化としての伝記」の素性を解明することができないで、それを解明するのに、この様な回り道をしなければならないのか——。

この点は、伝記研究の方法の上で重要な点と思われるので、次に、今日の伝記研究者が「回り道」をせざるをえない事情を省みよう。

さて、もし、人々が従来普通に考えている様に、「本来の伝記」の筆者のころが、固定した単純なもので、変質、変容の可能性を全く含まないとしたら

(その様に前提したら)、また、「各種の伝記」の筆者の立場が、普通信じられている様に、始からその様なもので(固定したもので)、その様な立場へ至る、いわば来歴を含まないとしたらどうであろうか——。

その様な考え方では、1. 先に(a)で示した「本来の伝記」の筆者の立場と、「各種の伝記」の筆者の立場との間に、如何なるつながりも生じる筈がなく、従って「文化としての伝記」全体の素性に関する先述した「くいちがい」は、そのまま残る(5節参照)。

2. また、6節に示した、「本来の伝記」の筆者のこころと、「各種の伝記」の筆者のこころとの間に深いつながりがあることを示唆する「諸事実」は、何故そういうことが起きるのか、全く理解(説明)できないことになる(6節参照)。

この様に、「伝記」の素性に関する「くいちがい」が解消されず、殊に「事実」が、どうしてそういう事実が起きるのか説明できないとすると、前述した、われわれの「前提」(人々の従来の方)そのものが間違っているのではないか、と疑われてくる。

われわれは、「伝記」に関する事実や問題を考える際に、普段「本来の伝記」の筆者のこころが、その変種を含むとか、「各種の伝記」の筆者の立場が「来歴」を含むとかは考えず、筆者の「こころ」「立場」は、どちらの場合も固定していて不変と考えているが、果たして、それでよいのであろうか——。

省みれば、われわれのその様な考え方(前提)は、確かめられたことでも自明なことでもない。また、そう考えねばならぬ特別の理由がある訳でもない。ただ、そう考えるのが普通であり、普段そう考えていて差支え(支障)がないというだけのことである。

それなら、いま、そう考えて(前提して)いては、「文化としての伝記」の「素性」に関する「くいちがい」が解消されず、「素性」に関する「諸事実」が理解(説明)できないという差支えが生ずるのだから、少なくとも試みに、その様な「前提」(考え方)を変えて、「本来の伝記」の筆者のこころは、変質、変容の可能性を含み(「変種」を含み)、「各種の伝記」の筆者の立場は、始からそうであったのではなくて、何かの変質、変容してそうなったもの、即ちそれが成立するに至った「来歴」を含むと仮定してみてもはいかがであろう

(1)
か——。

それによって、先にあげた「諸事実」がどうして起きるかを理解（説明）することが可能になり、ひいて、「文化としての伝記」全体の「素性」の真相が解明され、前述した「素性」に関する「くいちがい」も解消するのではない⁽²⁾か——。

「素性」に関連する「諸事実」を理解するために、ひいて「素性」の真相を解明するために、回り道をして、そもそも人々の「従来の思考法」を変革して、それでうまくゆかないかどうかみてみようとするこの様なわれわれの試みは、人々の従来の「思考法を変革する」という点ばかりでなく、そうせざるをえなかった右述の様な事情、理由においても、また、「試み」の様式（事実⁽¹⁾に仮説を投入して、その真偽を検証するという様式）においても、「コペルニクスの試み」と似ているのではないか——。

曾て、「先天的認識」の可能性に関して、われわれのと似た状況に陥り、同じ様に「人々の従来の思考法を変革する」という回り道をせざるをえなかつたカントも、そうせざるをえなかつた事情をコペルニクスの「事情」に準えて、次の様に語っている。「……このことは、コペルニクスの最初の考えと全く事情を等しくする。彼は（人々が信じている様に）星の全群が観察者の周囲を回転すると仮定した時、天体運動の説明をすることができなかつたので、観察者を回転させ、反対に星を静止させることによって、よりよい成功がえられないであろうかと試みたのである。」(I. Kant, K.d.r.V. BXVI)

さて、回り道をするのは右述の様な事情でやむを得ぬとして、問題は果たして、われわれが先に提起した「思考法の変革」と、それに基づく「仮説」によって、「文化としての伝記」の「素性」に関する「くいちがい」が、実際に解消され得るか否か、である。さし当たり、先述した「諸事実」が、それによって十分に理解（説明）されうるか否か、である。われわれの次の課題は、それを検証することである。

われわれは先に、この様に「事実」に「仮説」を投げ入れて、その真偽を「検証」する方法が、カントの所謂「実験的方法」であることを⁽³⁾みた。（そし

て、それがカントの所謂「コペルニクスの転回」の真の意味であることをみた。))

してみると、われわれは結局、予想した通り、「文化としての伝記」の「素性」の真相を解明するために、カントの所謂「実験」をせねばならぬのである。次に、節を改めて「実験」を試みよう。

(「実験」に先立って、念のためわれわれの「実験」の手順を述べておこう。

1. 「文化としての伝記」の「素性」を示唆する先述(6節)した「諸事実」を実験台とし、

2. 変革した新しい考え方(前提)に基づいて、「文化としての伝記」の素性(生れ)に関する仮説をたて、

3. 「仮説」を先の「諸事実」に投げ入れ、それによって「諸事実」が斉合的に、且つ十分に説明(理解)されるか否かを検証する。

もし、十分に説明されたら、投げ入れた「仮説」は真実となる。その「真実」が、即ち「文化としての伝記」の素性の真相である。というのは、「仮説」によって「伝記」の素性の真相を示唆する諸事実が、十分に説明されえたということは、これを逆にいえば、「諸事実」自身が、自分の根底にあるもの<「素性」の真相>は、投入された「仮説」の通りであると告白したことに他ならぬからである。)

8

先ず「仮説」であるが――、

a. 「本来の伝記」の筆者のころ(「伝記者固有の精神」)は、これを筆者の経験に即していうと、先述の様に、主人公そのひとへの全人をあげての傾倒である(第十二章参照)。

さて、従来の考え方(前提)に対して、変革した新しい考えでは、「本来の伝記」の筆者のころは変質、変容の可能性をもつ(従って、その「変種」を含みうる)筈。「仮説」は、この考え(前提)に従って立てねばならぬ。

さて、「傾倒」のころが果たして、その「変種」を含みうる(変質、変容の可能性をもつ)であろうか――。

いま、この様な視点から「本来の伝記」の筆者の経験を省みると、「傾倒」

の変質、変容を可能にする唯一の要素は、「傾倒」のところが含む当事者のこのところの緊張である。実例の分析（第八章）の際にみた様に、主人公そのひとへの傾倒は、当事者（筆者）のところに強い緊張を齎すが、それは弛み易い。また、その「弛み」に伴って「傾倒」のところが変質、変容する。われわれは、その様な変質、変容の一種の実例もみてきた（第十二章3節）。

b. この様な条件の下で、「新しい考え（前提）」のもう一つの内容、即ち「各種の伝記」の筆者の立場が、固定したものでなくて、そうなった来歴をもつということ、また、前述した「諸事実」が示唆していた「本来の伝記」の筆者のこのところと、「各種の伝記」の筆者のこのところとの根源における深いつながりを併せ考えると、われわれの「仮説」は、次の様にならざるをえない。

c. 当事者たる伝記者（筆者）のこのところの「緊張」が弛むと、主人公そのひとへの全人をあげての「傾倒」（主人公そのひとを自己存在の根底に担う底のこのところ——第十二章参照）は変質して、主人公そのひとに対する「尊敬」「敬慕」「思慕」等々になる（これらは、もはや、主人公そのひとを自己存在の根底に担う底のこのところではなくて、主人公そのひとを、自己存在の彼方に仰ぐ底の心情である——第十四章参照）。

（この変質によって生じた「尊敬」等の心情は、図式的にたとえていえば、心の緊張の強い圧力によって、それまで「傾倒」のうちに溶解されていた要素が、緊張の弛みに乗じて、析出したものといえよう。そして「傾倒」から「尊敬」等への「変質」そのことは、「出逢い経験」の強い衝撃によって開いた自己存在の底が、緊張の弛みによって忽ち閉じたために生じたともいえようか——。）

変質によって生じたこれらのこのところは、これを「傾倒」の変種（variation）と解してよいであろう。というのは、これらのこのところが、元の「傾倒」から生じたという来歴を含み、元の「傾倒」と血のつながりをもつ（逆にいえば、そこに元の「傾倒」が、質を変えて生きている）からである。

とまれ、ここに、主人公そのひとに対する「尊敬」「敬慕」「思慕」等々を原動力とする伝記の型が成立するが、これらは、「本来の伝記」の変種（変型）といってよいであろう（後述参照）。

なお、注意すべきは、ここでは「傾倒」は変質はするが、然し変質した傾倒（尊敬等々）は、筆者の心の内で、依然、筆者が伝記を書く原動力たるの地位を保っていることである。

d. ところが、「緊張」の弛みが更にすすむと、いままで「傾倒」に独占されていた筆者の心情の内へ、外から他種の様々の「思わく」（「目的」「好み」「狙い」）が侵入してくる。かくて、「傾倒」は力を弱め、終には、侵入した「思わく」に、「伝記」を書く原動力たるの地位を奪われるに至る。（この際は、先の「変質」の場合と異なり、元の「傾倒」は、筆者が伝記を書く「原動力」たるの地位を失っているから、＜「元の姿」を失っているから＞、これを「傾倒」のころの変容と呼ぶ。）といっても、「傾倒」は、この際、消滅するわけではない。力を弱めつつも、なお、いわば「思わく」のかげに潜み、筆者の新しい立場（ころ）の底流となって生きつづける。

ここに、侵入した各種の思わく（「目的」「好み」「狙い」）を原動力とする伝記記者の新しいころ（立場）が生れ、そのころ（立場）による伝記の型が生れる。「各種の伝記」がそれである。

「各種の伝記」の筆者のころは、この様に、もと「本来の伝記」の筆者のころが変容して生れ出たという来歴をもち、元のころ（「傾倒」）の血をひいているから、これもまた「傾倒」のころ（立場）の変種（variation）と解してよいであろう。従ってまた、「各種の伝記」は、「本来の伝記（「自己目的・自足的伝記」）」の変種（型）である。

結局、われわれの「仮説」は次の様になる。

「本来の伝記」の筆者の「伝記者独得のころ」（「傾倒」）は、筆者のころの緊張が弛むために変質して、主人公そのひとに対する「尊敬」「敬慕」「思慕」等々のころ（立場）になる。これらは、元の「傾倒」のころの変種（variation）である。ここに、これらのころ（変種）を原動力とする伝記の型が生れる。これは、「本来の伝記」の変種（「中間的性格の伝記」）である。

筆者のころの緊張が更に弛むと、筆者の心中へ各種の思わく（「目的」「好み」「狙い」）が侵入して、「傾倒」（或は「尊敬」等）にとり替り、終にその

「思わく」が、筆者が伝記を書く原動力たるの地位を占めるに至る。これは、元の「傾倒」のころの変容であるが、変容によって「傾倒」のころのもう一つの変種 (variation) が生じる。そして、ここに、この「変種」を原動力とするもう一つの伝記の型 (所謂「各種の伝記」) が生れる。「各種の伝記」は、「本来の伝記」の変種(型)である。

結局、「本来の伝記」の筆者のころ(「傾倒」)は、その変質、変容によって生じたと解することができる二種の変種をもつ。「中間的性格の伝記」「各種の伝記」は、これらの変種が生み出した伝記の型である。

9

次に、上述の「仮説」を先述した(6節)諸事実に投入して、それらが「仮説」によって十分に説明(理解)されうるか否かを検討せねばならぬ。

1. 先に(6節)、「本来の伝記」の実例の一つ、ロマン・ロランの『ベートルヴェンの生涯』の「序」に、この伝記を書いたロランの目的が記されているが、二つの「序」に示されたロランの「目的」(この書を書いた目的)が、互いに相違し、且つ、両者の間に「くいちがい」があることを指摘したが(第八章2、3節参照)、前述の「仮説」によって、この事実をどう説明することができるか――。

『ベートルヴェンの生涯』を書く原動力となったのは、筆者ロランのベートルヴェンそのひととの出逢い経験であり、その際の筆者のころは、ベートルヴェンそのひとへの傾倒である(第八章6節参照)。

然し、「傾倒」が含むころの緊張は、弛み易い。そこで『ベートルヴェンの生涯』を書いた後に「序」を書いた際のロランの心中には、「緊張」の弛みに乗じて侵入した「思わく」と、本来の「傾倒」とが混在することになる。

二つの「序」にあげられたロランの希い(目的)の「相違」や「くいちがい」は、この「混在」のために、次の様なプロセスが反転して二度行われたために生じたのである(第八章4節参照)。即ち、先ず第一序文では、ロランの本来の二つの目的の中の一方(A)が、侵入した「思わく」のために変貌し、且つ偏って強調された結果、他方(B)が忘れられ、第二序文では反転して、「思わく」

のために、(B)が強調された結果、(A)が軽視されることによって生じたのである (第八章4節、第九章1、2、3節参照)。

結局、先に指摘した「相違」や「くいちがい」は、「本来の伝記」の筆者(ロラン)のところに、「緊張」の弛みに乗じて各種の「思わく」が侵入した結果生じたのである (第九章1、2、3節)。

2. 先に(第三章～第十章)、現に世に行われている伝記を分類した際、その性格上、「各種の伝記」の何れにも属さず、「本来の伝記(自己目的・自足的伝記)」の一種とも思われぬ伝記風のもの(例えば、種々の「思い出」、「モニュメンタルな年代記」、「頌徳文にちかい伝記」の類)が存在した。「分類」の際には、その素性が判らず、そもそもそれが「伝記」であるか否かも確認しがたいまま、仮に、「中間的性格の伝記」として処理したが(第七章の註1参照)、今や先の「仮説」によって、その様な「伝記」が存在すること(事実)が納得される。

「仮説」によれば、「伝記」の筆者のころの緊張の弛みによって、「傾倒」が変質して主人公に対する「尊敬」、「敬慕(私淑)」、「思慕」等となるが、右述した「伝記風のもの」、或は「伝記に類するもの」は、これら変質したころの何れかを原動力として書かれた「伝記の型」と解される。

3. 小論第三章～第六章で行った分析によれば、「各種の伝記」の筆者の原動力は、各種の「思わく」である。それ故、筆者の主人公に対する関心は、筆者の各種の思わく(「目的」、「好み」、「狙い」)を介しての間接の関心である。主人公に対する直接の関心は含まれていない筈。

ところが、実際には、「各種の伝記」の中にも、時に、主人公に対する筆者の直接の関心の現われがみられることを先に指摘した。この「事実」は、「仮説」によって、次の様に説明(理解)される。

「仮説」によれば、「各種の伝記」の筆者の心中には、「本来の伝記」の筆者の原動力であった、主人公そのひとへの傾倒のところが底流となって生き残っている。それが、筆者の「思わく」の隙間をぬって表面に浮かび上がったのが、右述した「直接の関心」の現われである。それ故、先に指摘した様に、筆者の「思わく(目的、狙い)」が筆者に強く意識されていて、底流する「傾倒」

のところが浮上する隙間がない「利用された伝記」「歴史的伝記」等では、その様な「直接の関心」の現われは、殆どみられないのである。

4. 「本来の伝記」は、主人公そのひとへの傾倒（「出逢い」）を原動力とし、その「出逢い」を自分自身に確認し、人々にも、自分が出逢った主人公そのひとを伝えることを希って書かれるから（第十二章参照）、「本来の伝記」が読者の生き方と直接深いかかわりをもつのは当然である（第十四章）。従って、「本来の伝記」は、読者のところを刺す独得の「刺」をもつに違いない（第十四章、第十六章15節参照）。

これに対して、「各種の伝記」の筆者の原動力は、主人公そのひとに対する「傾倒」ではなくて、「各種の思わく」であるから、「各種の伝記」が（読者に対して）その様な「刺」をもつ筈がない。

ところが、実際には、先に指摘した様に、「各種の伝記」も、依然、人々（読者）の生き方と直接かかわりをもち、読者の心を刺す伝記独得の「刺」をもつ場合が多い（第十五章2節参照）。この様な「事実」を如何に説明（理解）すべきか――。

「仮説」によれば、「各種の伝記」の筆者の心底には、「本来の伝記」の原動力であった主人公そのひとへの「傾倒」が、変容しながらなお底流として生きつづけている。そこで、その様な「底流」を含む筆者のところで（伝記者のところで）書かれた「各種の伝記」は、ただ種々の「思わく」（目的、狙い、好み）だけで書かれた他の文化の作品（例えば、文学作品）とは異なり、「伝記」の一種として、依然人々（読者）の生き方と直接かかわりをもち、彼等の心を刺す「刺」を蔵するのである。尤も、その「刺」がいつも具体的な姿をとって現われ出るとは限らない（第十六章16、17節参照）。

10

以上、投入した「仮説」によって、先に（6節）あげた、「本来の伝記」と「各種の伝記」の素性に関連した「諸事実」、殊に、両者は根源ではつながっていることを示唆している「諸事実」を説明しえた。

してみると、われわれの「実験」は成功したのである。そして、「事実」に投入した「仮説」は、いまや「本来の伝記」の素性と「各種の伝記」の素性と

の関連の真相、即ち、両者を含んだ「文化としての伝記」全体の「素性」に関する真実となる（「諸事実を説明しえた」ということは、逆にいうと「諸事実」が己れの根底にあるもの、「素性の真相」を告白したことに他ならぬ）。

念のため、その「真実」の内容を整理してみると、

a. 「本来の伝記」の筆者のころ（「伝記者独得のころ」）は、固定したのではなくて、「立場」は変らぬが、そのはたらきは変質し変容する（「変種」を含む）。

b. 所謂「中間的性格の伝記（「思い出」等々）」の筆者のころは、「本来の伝記」の筆者のころが変質したものである。だから、それは、「本来の伝記」の筆者のころの変種（variation）といってよい。

また、「各種の伝記」の筆者のころは、「本来の伝記」の筆者のころが変容したものである。従って、これも「本来の伝記」の筆者のころの変種といってよい。

「中間的性格の伝記」「各種の伝記」の筆者のころは、何れも、この様な来歴（それが生じるに至る由来）をもつのである。

c. 「本来の伝記」の筆者のころと、「中間的性格の伝記」及び「各種の伝記」の筆者のころとは、根源的には、同じ一つの立場（精神の同じ一つの立場）のはたらきであり、両者の関係は、その「同じ立場のころ」（「伝記者独得のころ」）の元の種（いわば原種）と、その変種（variation）との関係である。

結局、「文化としての伝記」を創る精神（「伝記者独得のころ」）は、単純ではなくて、様々の変種を含んでいる。換言すれば、「伝記」を創る精神は、種々の変種に亘る広い支配領域（Gebiet）をもつ。

上述の様な「実験」の結果によって、先に「文化としての伝記」の素性に関するアポリアとみえたものも解消する。

「本来の伝記」の筆者の立場、そのころが即ち「伝記者独得の立場、そのころ」であり、これと対立する様にみえた「各種の伝記」の筆者の立場、そのころは、実は（根源的には）、その変種（variation）の一つにすぎない。

それ故、「文化としての伝記」の生まれが二通りあるのではなく、即ち、「文化としての伝記」を生むところが二種あるのではなく、「変種」を含んだ一種あるのみである。

11

「伝記は如何なる文化であるか」という問いに答えるために、先ず「文化としての伝記」の素性を問題としてきたが、右述した「実験」の結果を踏まえて、その「素性」は次の様なものということができよう。

「文化としての伝記」は、総じて精神の、伝記独得の立場（伝記者独得の立場）ではたらしき（「伝記者独得のころ」）の所産である。

「中間的性格の伝記」、「各種の伝記」の素性は、一見、「本来の伝記」の素性とは異なる様にみえるが、両者（「中間的性格の伝記」と「各種の伝記」）は何れも、実は、「本来の伝記」を創る元の精神（「伝記者独得のころ」）の「変種」によって創られた伝記（の型）に他ならぬ。「文化としての伝記」は、いかなる型をとるにせよ、根源的には、みな同じ一つの「伝記者独得のころ」の所産である。

（このことは、これを逆にいえば、「本来の伝記」の筆者のころ<「伝記者独得のころ」>は、変質し変容しながら「文化としての伝記」の全体<種々の「型」をとって展開する伝記の全体>に亘って、それらすべての筆者のころを支配し、生きて流れているということである。「伝記者独得のころ」は、根本的立場は変わらないが、そのはたらしきは、種々の「変種」を含むのである。換言すれば、「伝記者独得のころ」は様々の「変種」に亘る支配領域<Gebiet>をもつのである。）

12

以上、「文化としての伝記は、如何なる文化であるか」という問いに答える第一歩として、「文化としての伝記」の「素性」を解明したが、次に、その第二歩として（右の問いに、よりの確に答えるために）、「文化としての伝記」は、人間世界に、如何なる姿で実存するのか（したのか）、その正体、即ちその

生の姿、いわば生きしがままの姿（内容、構成、性格）を解明せねばならぬ。

さて、この章の冒頭に述べた様に、今日の人々は、「文化としての伝記」の正確な実態を殆ど忘れて（ありしがままの姿、即ち「実態」は、人々に忘れられて、いわば地中に埋もれている）。そこで、今日の人々が試みる、「伝記」の「素性」や「正体」に関する論議は、「実態」に基づかぬ空論か、又は、誤った実態把握に基づいた偏った見解が多い（拙稿「これからの伝記論のために」〈本学20周年記念論文集所収〉第一章参照）。

このような「空論」や「偏った見解」を正すには、先ず、地中に埋もれている実態を掘り起し、正確な実態把握に基づいて改めて「素性」「正体」を究明する他はない。前述した「素性」の解明は、その様にしてなされた。「文化としての伝記」の「正体」（生の姿、生きしがままの姿）の解明も同様の手順をふむべきはいままでもない。然も、今度（「正体」の解明）は、われわれが前節までで行った「素性」の発掘の結果明らかになった「伝記」の「実態」をも手がかりとすることができる。否、手がかりとせねばならぬ（後述）。

1. それで、先ず「文化としての伝記」の実態の発掘であるが、「実態」の発掘は、実は、以上に行った「素性」の発掘によって、一応完了したといえよう。

というのは、先述（2節）の様に、小論第三章～第十五章の探究によって、「創られた伝記」の実態が発掘され、いままた、前述した「素性」の発掘によって、「伝記を創るころ」の実態が発掘されたが、これによって、人間精神によって創られた「文化としての伝記」の実態は、創る側と、創られた側の両側面から明らかにされ、「文化としての伝記」の、いわば全容が地上に現われたからである。

とはいえ、われわれの「発掘」は、全体の発掘が一挙になされたわけではないから、ここで改めて、いままで部分的になされた発掘の結果を取りまとめ、「文化としての伝記」全体の正しい実態（全容）を確認しておく必要がある。

殊に、「実態」に関する人々の従来の誤った見解に対して、発掘された「実態」が如何に異なるかを確認しておかねばならぬ。「文化としての伝記」の

「正体」の解明(復原)は、「文化としての伝記」全体の正しい実態把握に基づいて始めて可能だからである。

なお、この際注意すべきは、「実態」と「正体」との区別である。

「実態」は、在りしがままの姿であっても、ここでいう実態は、まだ、遺跡、遺物、事蹟等を手がかりとして発掘された「文化としての伝記」の、いわば骨組にすぎない。先の比喻でいえば、地中から掘り出されたばかりの大寺院全体の骨組である。(例えば、地中から掘り出されたポンペイの街や、森林の中から発見されたばかりのアンコールワットの遺跡の様なものである。)

これに対して、ここにいう「正体」は、「文化としての伝記」が実際に人間世界に、いわば実存していた(他の文化と区別されて生きていた)、生きしがままの姿を指す。

「文化としての伝記は如何なる文化であるか——」との第三の問いに、十分的確に答えるためには、「実態」を明らかにするだけでなく、是正された「実態」に、いわば肉付けし血を通わせて、「文化としての伝記」の「正体」を復原しなければならないであろう(後述、第十七章2節参照)。

以上の様にみえてくると、「文化としての伝記」の「正体」を解明(復原)するには、——既にその「実態」の発掘が一応完了しているとはいえ——具体的には、なお、次の様な手順をふまねばならぬ。

a. 先ず、われわれのいままでの発掘によって明らかになった事実、実態をとりまとめ、それに鑑みて、「文化としての伝記」の実態に関する人々の従来の見解を是正し、補充し、また是正した「実態(骨組)」の特徴と、それを形成する諸要素及び諸要素間の関係、関連をよく見究め、

b. 「文化としての伝記」を、その骨組及び諸要素間の関係が形式上「伝記」と似通った具体的なものごとに準え、その「ものごと」の具体的な動きによって、「文化としての伝記」の正体を象徴的に示す(髣髴させる)(後述14節参照)。

先ず、小論で、いままでに部分的に発掘された「文化としての伝記」の実態のとりまとめであるが、「文化としての伝記」の実態は、便宜上、これを、「創られた伝記」の実態と、「伝記を創るころ」の実態とに別けることができる。そこで、ここでは、

A. 先ず「創られた伝記」の実態のとりまとめから始める。なお、ここでは、便宜上、人々の従来の誤った実態把握の実情を先へ省み、それと対比して、われわれが発掘した正しい実態をとりまとめて示すことにする。

1. 従来、人々が「伝記」として認めているのは、われわれの所謂「各種の伝記」のみである。所謂「中間的性格の伝記」（各種の「思い出」等）を、人々は、従来殆ど「伝記」として認知していない。

また、更に重要なことだが、人々は従来、われわれの所謂「本来の伝記」の存在は、これを完全に無視してきた（「これからの伝記論のために」第一章）。

2. さて、その「各種の伝記」であるが、人々は従来、これをただ、種々の文化の一部と（例えば、「文学的伝記」を「文学の一ジャンル」と、「歴史的伝記」を「歴史の一分枝」と）のみ解し、それ以上に、「各種の伝記」相互の間に、「伝記」としての積極的精神的つながりがあることは認めなかった。たかだか、それらの間に、形式的類似があることだけしか認めなかった。だから、「伝記」は、その「形式的類似」を意味する名にすぎない。

さて、「伝記」に関する従来の右述の様な見解では、結局、独立した「文化としての伝記」は何処にも存在しないことになる。

というのは、従来の見解では、実在するのはただ「各種の伝記」だけだが、その際の「伝記」それ自体は、右述の様な解釈では、独立して実在するのではなくて、ただ種々の文化の一部と一部との間の共通した形式的類似、もしくは、共通の名にすぎないからである。

3. 今日の人々の右述の様な「伝記」の「実態把握」は誤りである。

われわれは、小論第三章～第九章の探究によって、「各種の伝記」とは異質

の「自己目的・自足的伝記」の実例を探し当てた。「自己目的・自足的伝記」は、「各種の文化の立場」とは異なった、純粋に伝記の立場で書かれた伝記であるから、これこそ「本来の伝記」である。「本来の伝記」は実在するのである。また、かかる伝記の実例が存在することは、即ち「文化としての伝記」が他の文化から独立した文化であることを証する（第十、第十一章参照）。（「本来の伝記」の実例の発見は、先の譬でいえば、「文化としての伝記」という埋もれた、独立した大寺院の金堂が発掘されたことである。<「これからの伝記論のために」第二章>）

4. 先に行った「文化としての伝記」の「素性」の発掘によれば、「創られた伝記」の中には、「本来の伝記」の変種（変型）が含まれる。「変種」の第一は、所謂「中間的性格の伝記」である。

各種の「思い出」の類、「モニュメンタルな年代記」、「頌徳文に類した伝記」等は、従来、「伝記」として認知されていないが、先述した（8節の2、9節のc及び10節参照）それらの原動力となった筆者の心情の性格からみて、それらは右述した所謂「中間的性格の伝記」の実例と解されてよい（「これからの伝記論のために」第二章参照）。

5. 「変種(型)」の第二は、「各種の伝記」である。

「各種の伝記」は、一面では、種々の文化の領域に属するが、本来は、「本来の伝記」の変種（型）として、独立した「文化としての伝記」の一部である（8節の3及び10節参照）。

「各種の伝記」は、単なる「名」ではなくて、「本来の伝記」との血のつながり（積極的な精神のつながり）を意味する。従って、また、「各種の伝記」は相互に、血のつながりをもつ（9節の3及び10節参照）。

6. 「創られた伝記」には、「型」からいうと、右述の様に、「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」とその変種（型）（「中間的性格の伝記」「各種の伝記」）との三種がある。三者は「型」は違うが、根源的には同じ「伝記者独自のこころ」と、その「変種」によって創られたものとして、互いに血のつながり（精神のつながり）をもつから、あいよって独立した一つの文化領域を形

成する (11節参照)。

7. 「創られた伝記」が形成する文化領域は、その周辺 (「各種の伝記」) において、他の文化の領域と重なる。具体的にいうと、「各種の伝記」は、伝記であると同時に、他の文化の一種の姿をとり、他の文化の領域にも属する。いわば、二重国籍をもつ (9節の3、4参照)。

B. 次に、「伝記を創るころ」の実態であるが、ここでも、便宜上、先ず、人々の従来の誤った実態把握の実情を省み、それと対比して、われわれが今までに発掘した正しい実態をとりまとめて示すことにする。これによって、従来の実態把握を是正、補充することができよう。

1. 「伝記を創るころ」として人々が従来認めているのは、「各種の伝記」の筆者のころのみである。ところが「各種の伝記」の筆者が、「伝記」を書く原動力となったころの立場は、先述の様に各種の文化の立場である (第三章～第六章参照)。

しかも、人々は、従来、「各種の伝記」の筆者のころが、先にわれわれがみて来た様に、「各種の文化の立場」をとる様になる来歴をもつことを全く認めなかった。つまり、それが「伝記者独得のころ」の変種であることを認めなかった。そのため、人々は結局、「伝記を創る、伝記者独得のころ」の存在を認めることができなかった (第七章1節、「これからの伝記論のために」第一章参照)。

ところが、われわれが「自己目的・自足的伝記」の実例を分析して確認したところでは、「伝記を創るころ」は、本来は、他の文化の立場と異なった、伝記独得の立場での精神のはたらきである。「伝記者独得のころ」は存在するのである (第七章2、3節及び第十章参照)。

2. 「伝記を創る精神」は、普通考えられている様に、固定した単純な精神ではなくて、筆者のころの緊張の弛みによって、変質し変容するが、しかも、一貫して元の立場を維持し、その立場がその変質し変容した筆者のころを支

配しつづける底の精神である。それ故、「伝記を創るころ」は、変質、変容したところを含む一定の支配領域 (Gebiet) をもつ (第十六章 9、10 節参照)。

3. 「伝記を創るころ」の変質、変容は伝記者のころの緊張の弛みという一連の原因によって起きると解することができるから (7 節参照)、右述した「支配領域」は、いわば連続して拡がる領域である。

4. 「伝記を創るころ」の支配領域は、その末端 (「各種の伝記」の筆者のころ) において、他種の文化を創るころの領域と重なり合う。具体的にいうと、「各種の伝記」の筆者のころは、一方「伝記」の領域に、他方、同時に「各種の文化」の領域に属する。「各種の伝記」の筆者のころの表面の立場は、各種の文化の筆者の立場 (例えば、文学者の立場、歴史家の立場等) であるが、彼の心底には、変容した「伝記者独得のころ」が底流している (第十六章 8、9 節)。

(先述した「各種の伝記」の所謂「二重国籍」は、右の「各種の伝記」を創るころの二重性格の結果である。)

以上、小論で今までに発掘した「文化としての伝記」の実態の中、「創られた伝記」の実態と「伝記を創るころ」の実態を総括し、人々の従来の実態把握を是正、補充したが、われわれの次の課題は、是正、補充されたこの実態に肉付けし、血を通わせて、「文化として伝記」の正体を復原することである。

(「復原」の作業に入るに先立って、復原すべき「文化としての伝記」の三要素 <「内容」、「構成」、「性格」> について、それらがここでは各々何を意味するかを示しておこう。

ここに「文化としての伝記」とは、「精神の、独得の立場でのはたらきの所産としての伝記」である。それ故、それはただ創られた「伝記」だけでなく、「伝記」を創る、独得の立場での精神のはたらきをも意味する。また、ここで「文化としての伝記」の領域という場合には、それは、一方、独得の立場の精神 <「伝記者独得のころ」> が支配するころの領域を、他方、それによって

創られた様々の型の伝記が形成する文化領域を指す。

前者<「伝記を創るころ」>の正体が、ここにいう「文化としての伝記」の「内容」であり、後者<創られた伝記>の正体が、「文化としての伝記」の「構成」である。

また、ここにいう「文化としての伝記」の「性格」とは、「文化としての伝記」が、総じて人間に対してもつ[●]独得の[●]意義を指す。「文化としての伝記」が、他の文化とは異なった独立した領域を形成する以上、それはもと<その生の姿においては>、総じて人間に対して、他種の文化とは異なった[●]独得の[●]意義をもつ筈である。

14

さて、「文化としての伝記」の正体の復原は如何にして可能か——。

いろいろな方法があると思われるが、ここでは、次の様な方法をとることにする。

「文化としての伝記」を、それと形式上相似した諸要素から成り、しかも、その諸要素間の関係が「伝記」の場合と相似する様な具体的な（形、姿を具え、直観的に知りうる様な）ものごとに準え、その「ものごと」の実際の具体的な（直観しうる）[●]生きた動き（生きて、はたらいっている姿）によって、「文化としての伝記」の正体（生きた姿）を象徴的に示す（髣髴させる）。

（「文化としての伝記」の「性格」の復原は、これとはやや異なった仕方によった——後述、18節参照。なお、「正体」の復原は、繁雑を避けるため、ここでは、「文化としての伝記」の「内容」と「性格」についてのみ行う。）

無論、この様にして髣髴させようのは「文化としての伝記」の生きた全容ではない。然し、それでも、われわれはこれによって、「伝記」が実際に他の文化から独立して、[●]どの様に人間世界で生きて（実存して）いるか、いたか、その姿の一端を納得することができよう。

便宜上、「文化としての伝記」の「内容」、即ち「伝記を創るころ」の正体の復原から始める。

「復原」の要点は、前述の通り、「伝記を創るころ」を何に準えるかである。ここでは、特に、それが次々に変質、変容して変種を生む点に着目し、また、次の様な生物学上の「変種」の意味をも参酌して、それを、広い湖（「文化」という湖）の一隅に投げられた一箇の石が生み出した「水の盛り上がり」と、それが描く波紋（輪を描いて四方に拡がる波）」に準えた。

（辞書——「広辞苑」（岩波）によると、「変種」は、生物の分類上では、普通、同一種の中で、若干の形質＜分類の指標となる形態上の特徴と性質＞が異なり、地理的に異なる分布圏を占有するものを指す。）

1. 投げ込まれた石は、水面に強い衝撃を与え、水は一瞬盛りあがる。

（「投げ込まれた石」は、筆者と主人公との「出逢い」を象徴し、それによる「水の盛り上がり」は、「出逢い」による、筆者の内なる「伝記者独得のころ」の目覚めと、筆者のころの昂揚と緊張を象徴する。）

2. 盛りあがった水が、水面に波紋を生じ、波の輪を四方へ押し拡げてゆく。石が投げ込まれた点を中心として、波の輪は同心円を描いて次々に四方へ拡がってゆく。

（「盛りあがった水」が波紋を生み、それを周辺へ押し拡げるのは、目覚めた「伝記者独得のころ」が、固定したものでなく展開してゆくことを象徴する。次々と拡がる波の輪は、その「展開」が段階をなすことを象徴する。）

拡がる波の輪が同心円を形成するのは、「伝記者独得のころ」の立場が常に一つで、「展開」のどの段階でも変らないことを象徴する。）

3. 周辺へと拡がる波の輪は、みな求心力によって、石が投げ込まれた一つの中心と結ばれている。

（波の輪の一つ一つは、「伝記者独得のころ」の展開の一々の段階の象徴であるから、一々の波の輪をひきつける求心力は、右の「展開」のどの段階に対しても、「伝記者独得のころ」の＜緊張＞の支配が及んでいることを象徴している。即ち、元と同じ立場のころが、「展開」の凡ての段階を支配していることを象徴している。）

4. 然し、周辺へ行くにつれて、波紋を押し拡げる力は弱まる。中心からの求心力も弱まる。それに乗じて波紋の質が変る。波のうねりは緩やかになり、

波頭は低くなる。然し、まだここでは、とにかく、白い波頭が水面に見えている。

（「波紋を拓げる力が弱まる」のは、「展開」がすすむにつれて「伝記者独得のこころ」の「昂揚」が次第に失われることを、また「求心力」の弱まりは、筆者のこころの「緊張」が次第に失われ、元のこころによる支配が弱まることを象徴する。それに乗じて波紋が変質するのは、「緊張」が失われ、元のこころの支配が弱まって、伝記者の心中へ様々の思わくが入り込み、その為、伝記者のこころが元の純粋性を失って変質することを象徴する。伝記者のこころは、もはや元の「傾倒」のこころではない。）

5. 上述の様な波紋（変質した波紋）がしばらく続いた後、波紋を押し拓げる力が更に弱まると、波紋は終に変容する（かたちが変る）。

白い波頭はもはや水面にみられなくなり、水面には、ただ水のうねりが見られるばかりである。（これは、白く見える波頭がなくなったのであるから、波のかたちの変化、即ち変容である。）

（白い波頭が水面に見えなくなったのは、「出逢い＜傾倒＞」に伴う筆者のこころの盛りあがり、筆者のこころの表面からは消えて、＜筆者が「伝記」を書く原動力となる力を失って＞心底へ潜んだことを象徴する。）

6. 「うねり」だけが残る水面へ、別の中心からの波が押しよせて、「うねり」の上へ重なり、水面には、その「別の中心からの波」の白い波頭ばかりがみられる様になる。

この際、変容した先の「波のうねり」は、消滅したわけではない。別の中心から来た波と重なった（水面下にもぐった）というだけのことである。

（波頭を失った「伝記」の波の上へ、「別の中心から来た波」が重なり、その白い波頭だけがみられるのは、筆者のこころへ侵入した各種の「思わく」＜目的、狙い、好み等＞が力を増し、終に、筆者の心中、元の「傾倒」のこころに替って、「伝記」を書く原動力の地位を占めたことを象徴する。

また、「変容」した先の波＜「うねり」＞が、消滅せず、「別の中心から来た波」と重なり、水面下に残っているのは、変容した「伝記者独得のこころ」が、消滅せず、伝記者の心底に生きつづけていることを象徴する。⁽⁴⁾

また、この様に、変容した「伝記を創るころ」の波の上へ、「別の中心からの波」が重なるのは、「伝記を創るころ」の領域が、その周辺で、「他種の文化を創るころ」の領域と重なることを象徴している。

7. こうして、投げ込まれた石による水の盛り上りを原動力とし、投げ込まれた点を中心として、変質、変容しながら同心円を描いて、次々に四方に拡がる波の輪は、終に、湖面の中、一定の範囲の水面を占領して、いわば、投げ込まれた石の衝撃が生み出した「水の盛り上り」の「場」を湖面に形成する。

(湖面でのこの様な「場」の形成は、主人公と伝記者との出逢いによって目覚めた「伝記を創るころ」が、「伝記者独得のころ」〈主人公そのひとへの傾倒〉と、その変種 (variation) とから成る一定の拡がり、それら凡てを支配する「伝記者独得のころ」の立場とから成る、独立した一つの「支配領域 (Gebiet)」を文化の中に形成することを象徴している。

逆にいえば、「伝記を創るころ」は一樣ではなく種々あるが、それらはみな、元の「伝記者独得のころ」が変質、変容して生れたという来歴をもち、あい寄って文化の中に、独立した一つの領域を形成することを象徴している。

——未 完——